The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	接続助辞ガ・ケレドモの意味・機能と文法的制約
Author(s)	齊藤, 美穂
Citation	阪大日本語研究. 2011, 23, p. 33-55
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/4682
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

『阪大日本語研究』23（2011）

接続助辞ガ・ケレドモの意味・機能と文法的制約

Grammatical restrictions on the clauses connected with conjunctive particles “ga” and “keredomo” according to their meaning and function

齊藤 美穂
SAITO Miho

キーワード：接続節の意味・機能、文法的制約、並列的構造／非並列的構造、対立

要旨

接続助辞ガ・ケレドモは、「逆接」「対比」関係といった意味を表すほか、「前置き・注釈」や「談話主題の提示」などに用いられるとされる。また、ガ・ケレドモによって構成される複文は、他の形式による複文に比べて文法的な制約が少なく、接続節（従属節）が終止節（主節）とほぼ対等の関係にあるとも指摘されている。しかし、一部の意味・機能を果たす場合、その対等な関係が崩れ、それぞれの節にさまざまな形で文法的な制約が生じる。本稿ではガ・ケレドモの用いられた実例を収集し、その中で接続節と終止節が意味・機能面からも文構造からも対等とは言えない「非並列的」な構造をとっているものの分析を試みた。そして、接続節の意味・機能という観点から 4 つの下位タイプを認め、それぞれの意味・機能タイプと文法的な制約の間の相関性を示した。

1. はじめに

接続助辞ガ・ケレドモ[1)]によって構成される複文については、先行研究において既に重要な指摘が多くなされている。両形式は、いわゆる「逆接」を表す代表的な形式の一つとされながら、他の形式とは異なる特徴の一つとして、「前置き」「題目・場面提示」（永野 1951）といった、「逆接」とは全く異なる意味・機能をもつことが、多くの論考で指摘されている（森田 1980、小出 1984、丹羽 1999 等）。また、複文全般の研究の中でしばしば議論される、「従属節」内に現れる要素、あるいは「主節」に現れうる文のタイプという点において、他の多くの形式に比べて相対的に制約が少ないとされる（南 1974,1993、野田 2000 等）。ガ・ケレドモによって構成される複文には、その意味・機能においても文法的な特徴においても、多様なものが見られると言える。

しかし、ガ・ケレドモの複文がもつとされる多様な文法的特徴は、常に現れうるものではない。たとえば、次に示すような「題目」（永野 1951）あるいは「談話主題」の提示（小出 1984）と称される例では、指示的な名詞句が〈断定・非過去〉の形の助辞「だ（です）」を伴っている

ものであることが指摘されている（高橋 1999）。これらの特徴を満たさなければ、この機能は果たせない。

・昨日の話だけど、どうなった？

このように、ガ･ケレドモの意味･機能によっては、その文法的特徴が制約されることがある。ガ・ケレドモが表す意味・機能を詳細に記述した研究は少なくないが、それぞれについて、この文法的特徴の制約を総合的に分析したものはほとんど見られない。そこで、本稿では、実例をもとに分析を行い、ガ・ケレドモを用いた文に生じる文法的制約が、意味・機能との相関によるものであることを示すことを目指す。

以下、まず、2 節において本稿に関わる先行研究の重要な指摘を概観し、改めて問題のありかについて述べる。3 節では分析にあたって用いた資料や分析の観点といった研究方法を示す。そして、4 節で文法的特徴と意味・機能の分析結果を示したうえで、5 節においてその結果をまとめ、両者の相関性について述べる。そして最後に 6 節で、今後の課題として、ガ・ケレドモのもつ意味・機能と談話構造（談話の流れ）との関わりについて指摘する。

2.　先行研究の概観

分析に先立ち、本稿の目的に関わる先行研究の指摘をごく簡単にまとめ、確認しておく。そのうえで、問題のありかを改めて確認する。なお、複文に関する用語は研究者によってさまざまであるが、説明の便宜上、以下本稿では、ガ・ケレドモに先行する部分を（必ずしも「節」とは言えないものもあるが）「接続節」、後続する部分を「終止節」と称しておく。また、「複文」という用語自体も、ここではいわゆる「重文（並列複文）」「複文（従属複文）」を併せた広義の意味で用いる。

・凡例：太郎は一生懸命勉強したが、試験は不合格だった。

＜接続節＞　　＜終止節＞

2.1.　文法的な特徴

まず、文法的な特徴に関する記述を見ておく。複文に関する先行研究においては、南（1974,1993）に代表されるように、接続節に現れうる要素によって、その下位分類が示されている（野田 2002 等も参照されたい）。その中で、ガ･ケレドモが接続して構成される接続節（南 1974,1993 では「従属句」）については、種々の接続節の中で最も多様な要素が現れうるグループ（C 類）に分類される。他のグループには現れない特徴的な要素としては、下記のようなものがある（南 1993 参照）。

・（接続節の）「述語的部分の要素」：～マイ、～ダロウ、～ウ、～ヨウ
・（接続節の）「述語的部分以外の成分」：いわゆる（主題）の～ハ、タブン・マサカの類、他のＣ類従属句[2)]

「～マイ」「～ダロウ」が現れることに示されるように、ガ・ケレドモの接続節においては認識的ムードが分化する。この点は、「逆接」を表す他の形式（逆条件形シテモや接続助辞ノニ）による複文とは異なる特徴でもある。終止節においては、叙述文（断定・推量）だけでなく、命令文や勧誘文、質問文など、特に制約なしに多様な文のタイプが現れるが、上記の接続節に見られる特徴は、この終止節のタイプ等によって制約を受けることがない、独立したものであるとされる。これらの点も、他の「逆接」を表す形式による複文には見られない特徴である（前田 1995 参照）[3)]。このような点から、ガ・ケレドモの接続節と終止節は、その文法的特徴においてはほぼ制約がなく、対等の関係にあると言える。

2.2. 意味・機能との関わり

次に、意味・機能について確認する。ガ・ケレドモの表す意味関係としては、まず「逆接」及び「対比」が挙げられる（永野 1951、森田 1980 等）。渡辺（2000）によれば、これらは「推論的逆接」「対比的逆接」として、広義の「逆接」の下位区分とされる。両者は次のように定義され、その違いは前件（接続節が表す事態）と後件（終止節が表す事態）の間に何らかの因果関係が前提となっているか否かであると言える[4)]。

・推論的逆接：前件と後件の事態の間に社会通念上妥当な何らかの因果関係が認められるもの
・対比的逆接：前件と後件の事態間に何らかの意味的コントラストを含むもの

ただし、渡辺（2000）も指摘するように、両者の違いはあいまいな場合もあるため、本稿でもこれらをひとまず広義の「逆接」関係としてまとめておく。

「逆接」以外には、「前置き」「談話主題の提示」（永野 1951）などがあるとされる。小出（1984）では、ガの意味・機能のうち、「逆接」を表すものを「情報伝達を中心とするもの」と位置づけ、「逆接」以外のものについては、「コミュニケーションの円滑化に関わるもの」としている。そして、その下位分類として下記のものを挙げている。（S1、S2 はそれぞれ本稿の接続節、終止節を指す。まとめは筆者、用例は小出 1984 による。）

（1）「談話主題の提示」：S1 が、S2 の「叙述の範囲」を示し、S2 が S1 について述べるという、「主題提示と呼ばれるものの基本的性格を備えている」もの。
・昨日の話ですけど、どうなりました。

（2）S1 を名詞修飾節として S2 の中に入れ、「単文化」できるか否かで下位分類される。
a.「補足説明の提示」：括弧内に示すように「単文化」が可能なもので、S1 は相手あるい

は場面によっては必要のない情報を加えるもの。

・1912 年というのは明治の終わった年ですが、この年に私の姉は生まれました。
（明治の終わりである 1912 年に、私の姉は生まれました。）

b.「前置き」：S1 が S2 の導入部として機能していたり、S2 を述べる間接的な理由づけになっていて、a. とは異なり、「単文化」はできない。

・おたくの大学に入りたいという学生がいるんですが、手続はどのようにしたらいいんでしょうか。

（3）「注釈」：発話行動の構成要素に対して言及される、メタリンガルなもの。

・夜分遅く恐れ入りますが、太郎君はいらっしゃいますか。

上記の（1）から（3）はいずれも、接続節にあたる部分が、終止節を述べるにあたっての前提となることを示すものであったり、終止節を述べることについての話者のコメントであったりする[5)]。ガ・ケレドモには、「逆接」以外に上記のような意味・機能が認められている。

2.3. 問題のありか

以上のように、ガ・ケレドモによって構成される複文（以下、「ガ・ケレドモの複文」と称す）については、文法的な特徴、意味・機能というそれぞれの面から、既に数多くの重要な指摘がなされている。しかし、そこで指摘されている文法的な特徴というのは、いわば「最大値」であり、必ずしも常に確認できるわけではない。たとえば、2.2 節に挙げた小出（1984）の（1）や（3）については、その意味関係からも、接続節の内容は、終止節の内容に依存しているものと言える。このような場合、文法的な特徴の面においても何らかの制約を受けるのではないだろうか。実際に、（1）の「談話主題の提示」については、1 節で挙げたようにテンス・ムードの分化がなくなるといった制約が生じている。

このように、ガ・ケレドモが実現する意味・機能に応じて、文法的特徴に制約が生じてくると考えられる。先行研究では、この点に関する記述が部分的なものにとどまり、総合的な記述は、管見の限りまだ見られない。そこで、本研究では、ガ・ケレドモの複文に生じる文法的な制約について分析を行い、それが意味・機能との相関によるものであることを示したい。

3. 研究方法

2.3 節で挙げた問題のありかをふまえ、本研究では次のような方法で分析を行った。

3.1. 分析対象と資料について

本研究では、さまざまな用法を網羅的に扱い、より客観的な記述を行うことを目指し、実例にもとづく調査を行うこととした。具体的には、現代日本語で書かれた小説を主な資料とし、ガ・ケレドモの用いられた例を収集した[6)]。一部用例数の不足を補い分析の助けとするため、新聞コーパスも利用した[7)]。稿末に資料一覧を示しておく。

両資料の間には文体の違いが存在し、さらに小説には「会話文」以外に「地の文」という異なるテクストタイプが共存する。本稿では、現代日本語に現れるガ・ケレドモの用法のバリエーションが相対的に多く現れる「会話文」の例の分析結果を中心に取り上げることとするが、テクストタイプによる差異が見られない場合に限り、「地の文」や新聞から得た用例も適宜引用する。

3.2. 分析の対象

2.3 節で述べたように、接続節の内容が、終止節の内容に依存している場合、文の構造面にもそれが表れると考えられる。実際、ガ・ケレドモの例には、次の各組の a、b のような 2 つのタイプが見られる。以下では接続節に相当する部分に棒線、終止節に相当する部分に波線を施して示す。

1）a. 花子は太郎が犯人だと言ってたけど、幸子は次郎が犯人だと言ってたよ。
　b. 花子が言ってたけど、太郎が犯人だって。
　　（花子が太郎が犯人だって言ってた。）
2）a. 部長の話というのは例の話だったけど、新しい情報はなかった。
　b. 例の話だけど、新しい情報はないよ。
　　（例の話なら、新しい情報はないよ。）
3）a. 置き去りにしたのは薄情だったけど、助けてあげる余裕がなかった。
　b. 薄情だけど、彼女を置き去りにしてしまった。
　　（薄情にも、わたしは彼女を置き去りにしてしまった。）

上に挙げた各組の a. の場合、接続節と終止節が意味内容の面からも文の構造という観点からもそれぞれ独立した文相当の内容をもち、典型的な「複文」となっている。これに対し、b. の場合は、括弧内に示した文から示唆されるように、程度差はありつつも、「単文」に近づいていると言える。1b. では、接続節の「言う」の内容が終止節に述べられている。2b. の接続節は、終止節で話題とする事柄を提示し、3b. の接続節は、終止節の内容への評価を表す「独立語」相当の部分として機能していると考えられる。つまり、b の例では、次のような関係にあるも

のがガ・ケレドモを介して接続されている。

①接続節が終止節にとって、一つの「文の成分」相当であるもの。

②終止節が接続節の述語にとって「引用句」の内容にあたるもの。

本稿では、上記 a のようなものを、接続節と終止節がそれぞれ独立した文相当の内容をもち、形式面からも対等といえる関係にあることをふまえ、「並列的構造」の例とする。これに対し、b のような、上記①②の関係となるものを「非並列的構造」の例と称す。「並列的構造」をとるものについては、特に文法的な制約は見られないが[8)]、「非並列的構造」をとるものには、さまざまな形で文法的な制約が見られる。そこで、以下では、3.1 節で示した資料から収集した用例の中から、「非並列的構造」の例を取り上げ、そこに見られる特徴を確認していく。

3.3. 分析の観点

4 節での分析に先立ち、主な分析の観点を示しておく。

3.3.1. 接続節の意味・機能

非並列的構造をとる場合、接続節にあたる部分は、必ずしも独立の事態を表さない。このため、「2 つの節によって表される事態間のどのような関係を表すか」といった観点から、ガ・ケレドモの意味・機能を記述するのは難しい。そこで、本研究では、「接続節が終止節にとってどのような働きをするか」という観点から、その意味・機能を記述することとする。そのうえで、なぜガ・ケレドモが用いられるかについて考察する。

3.3.2 文法的特徴

接続節の意味・機能ごとに非並列的構造をとる例を見ていくと、意味・機能の違いに応じて、下記の点で異なる制約が確認できた。これらは、並列的な構造をとる場合には、特に制約されないものである。

①ガ・ケレドモが直接接続する語のタイプ

②接続節の述語の文法的カテゴリー

③接続節の主語の人称

④終止節の文のタイプ及びモダリティ

そこで、本稿では、特に上記の点に注目して分析を行っていく。そのほかにも、文法的な特徴が見られれば、適宜言及する。

4. 非並列的構造をとる場合の意味・機能と文法的制約

3.3.2 節で述べたように、非並列的構造をとる例では、さまざまな形で文法的な制約が加わってくる。本節では、非並列的構造をとる例について、その意味・機能と文法的制約について分析を行った結果を述べていく。

4.1. 接続節の意味・機能から見た 4 タイプ

3 節で示した基準にもとづいて、収集した用例のうち、非並列的な構造をとる例を見ていくと、接続節が終止節に対して果たす意味・機能という観点からは、主要なタイプとして、大きく分けて次の 4 つが認められる。次節以下で、各タイプの特徴を確認していく。

A. 終止節の発話の、発話場面との関係を表すもの
B. 終止節で述べられる事態の確認のし方を表すもの
C. 終止節で話題とするものごとを指し示すもの
D. 終止節の内容への話し手の否定的な評価を表すもの

4.2. 文法的特徴との関わり

4.1 節で挙げた各タイプの意味・機能を果たす例には、共通する文法的特徴が確認された。本節では実際の用例を挙げながら、タイプごとにその文法的特徴を記述していく。これ以降も用例を挙げる際には、当該文の接続節に棒線、終止節に波線を施して示す。特に言及すべき部分がある場合には、予め断ったうえで別の種類の下線を用いることもある。

4.2.1. タイプ A

タイプ A は、接続節が終止節の発話の、発話場面との関係を表すものである。このタイプになるのは、下記のようなものに限られる。

・ガ・ケレドモが接続するのは、発言を表す動詞である（「言う」等。以下、「発言動詞」と仮称。「尋ねる」という意味の「聞く」もここには含まれる）。
・発言動詞は、基本的にスルの形（断定・非過去・肯定）で現れる。
・発言動詞の主語は、一人称であるが、基本的に示されない。

一方、終止節については特に制約はなく、どんな文のタイプも現れる。

1）（前略）「僕がいったということは、絶対に誰にもいわないでください」／「もちろん。私達を信じてください」／「じゃあいいますが、僕は東都大学で梅沢講師の研究グループに

いるのです」／「ええ」／「それで梅沢先生と比較的親しいのですが、去年の秋に、帝都大学の佐伯助教授のことをいろいろきかれたのです」（脳は 295）

2）「カメラは四×五にしなさいね」／「分かってる」／「リース屋さんで借りればいいんだから」／「そんなことは、私の方が詳しいの！」／「じゃ言うけど、時計のバンドをこの絵みたいに丸く固定するの、これどうするか知ってる？」／「……」／「バンドは自然に丸くなってはくれないわよ」（恋物 169）

3）「いや、そうじゃないんです。聖書にはそう書いてありません。〈義人なし、一人だになし〉と、ちゃんと書いてありますから」／「いや、聖書なんかに何を書いていようと、おれの見た目にまちがいはない。いや、おればかりじゃない。だれが見たって、偉い奴は偉いし、ばかな奴はばかだ」／（中略）／「どうも弱りました」／「じゃ聞くがね、おれと三堀もおんなじだっていうのかね。冗談じゃない。おれは三堀よりは少しはりこうなつもりだぜ」（塩狩 315）

上の例からもわかるように、上記のほかに、このタイプには次のような特徴が見られる。

・接続節が、接続詞「じゃ」や理由・目的を表す節を伴って現れる（以下では当該の箇所に二重線を付して示す）。何も伴わない場合は、発言動詞が補助動詞「おく」とくみあわさって現れる。

4）「そこまではわかりましたが、お医者さんの一部には、相田義男にロボトミーをおこなうのは行き過ぎではないかという批判も多いようですが」／「じゃあお聞きしますが、その批判をしている人達は、相田義男を診察したのですか」／「いえ、それは……」（脳は 166）

5）「僕は、鳥飼希代子と淡路新一郎の子供なんだそうです。どう思われますか」／下手くそな芝居だ、と後悔が走る。彼の口が静かな力で引き絞られた以外に、変化は起こらなかった。で、続けてこう言った。／「どうせ訊かれることなので、全部言いますけど、そのことは八重さんから訊き、母に確認しました。生年月日は……」／新一郎は、まばたきをしない。自分に似ているのかもしれない、と感じた。（霧の 230）

6）「あいつはなんでも持ってるんだよ。（中略）背も高いし、男っぷりもいい。女にももてる。おれはな、お前だから言うけど、今度うまれたら、ああいう男になりたい。心底思うね。それと」（あ・29）

7）「これ見て」／娘も同じようにバッグから何かを取り出し、こちらへ差し出した。どうやら写真のようだ。受け取って見ると、そこには私が写っていた。（中略）何も言われなくて

も、娘の婚約者が調べたのだと察しがついた。／「言っておくけどね」／手毬が口を開きかけたのを遮るように私は言った。／「あんたの父親だって、私と結婚する時にこうやって何でもかんでも調べたんだからね」（落花 107）

8）（前略）（※筆者注：クラスの書記に選ばれた「ぼく」の名が呼ばれると、笑いが起こる。）いつも、そうなのだ。ぼくが、何か行動を起こす段になると、女の子たちの好意的な笑いが周囲に巻き起こる。そして、ぼくは、それが大好きだ。／「時田秀美です。最初に言っとくけど、ぼくは勉強が出来ない」／（中略）／「おまけに字も下手だ」／益々、皆、笑い続けた。／「それなのに、どうして、ぼく、書記なんかになっちゃうの」（ぼく 13）

上記のような接続詞や理由節等を伴うことが、このタイプでは重要である。接続節に、スルという形の発言動詞を用いることで、話し手は発言の意志を表しているのだが、日常生活のいちいちの発話場面において、常にそのような意志表明が行われるわけではない。「じゃ」や理由節によって、話し手は、自身の発言が相手の発話をふまえて行われるものであること、あるいは理由節に示される条件下で初めて行われるものであることを示している。理由節の内容も基本的には当該の発話場面あるいは話者のおかれた状況を示すものであり、接続節は全体として、終止節の発話を、当該の発話場面へと関係づけるものとなる。なお、「言っておくが」の場合、補助動詞とのくみあわせによって、何らかの目的をもって発言が行われることが示される。用例を見ると、相手の言動や発話時の状況に触発されて「言っておくが」が用いられており、やはりこの場合も、発話場面との関係づけが行われると考えられる。

このことは、逆に言えば、そのような条件下でなければ後続する発話はなされないものであることを暗示しているとも言える。実際、このタイプの終止節で述べられるのは、相手への非難や秘密など、通常は口に出しにくいものである。「（相手が）お前だから言うけど、そうでなければ言わない」ことであるといった対立を暗示しうる点に、ガ・ケレドモが用いられる動機があるのではないだろうか。

4.2.2. タイプ B

タイプ B は、接続節が終止節で述べられる事態の確認のし方を表すものである。確認のし方によって、推量タイプと伝聞タイプという下位タイプに分けられる。まず、このタイプの全体的な特徴として、次のことが挙げられる。

・ガ・ケレドモに接続するのは下記の語彙的な意味をもつ動詞または名詞である[9)]。

（1）推量タイプ：思考活動を表す

（2）伝聞タイプ：言語活動を表す

・終止節が、それぞれの下位タイプ（推量／伝聞）に応じたモダリティ形式をとる。

以下、下位タイプ別に見ていく。

(1) 推量タイプの場合：

このタイプでは、ガ･ケレドモが、思考活動を表す動詞または名詞に接続し、終止節の述語は、「～ダロウ」「～カシラ（カナ）」など､推量であることを表すモダリティ形式をとる（「～と思う」のような思考動詞とのくみあわせもこれに準ずるものとみなす）。質問文の場合もあるが、この場合は単なる質問というより自身の考えに対する同意を求める文となる。接続する語が動詞の場合と、名詞の場合とで、それぞれ異なる特徴をもつ。

＜動詞の場合＞

・思考動詞は肯定形式で現れる。スルのほかシタ・シテイルなどの形も可能だが、必ず「ノダ」の形をとる。

・思考動詞の主語は一人称に限られる。明示されないこともある。

9）「罪ほろぼしに？」／「多分ね」／「だったら私思うんだけど、あの子があなたに望むのはこれ以上甘やかされることではないような気がするの。あの子図に乗ってるけど、本当は自分を自分で持て余しているんだと思うんです」（砂の 140）

10） 由香がそのことを口にすると、／「そりゃ、俺たちの本番だからねぇ」／萩原はからからと笑った。／「でもね、つくづく思うんですけど、選挙期間ってあまりにも短くないですか。たった一週間ですよ、一週間。それっぽっちで、こちらの考え方や人間性がわかるんでしょうか」（幸福 179）

11）「ねえねえ、あたし、前から思ってたんだけどさ」／千秋が急に思い出したように貴子の顔を見た。／「貴子と西脇君って似てない？　なんとなく目の辺りとかさ」／貴子は息が詰まりそうになった。／「あたしと彼が？　似てないよ、全然」／「そうかなあ。あたしはなんか似てるなって思ってたんだけど。梨香、そう思わない？」（夜の 43）

＜名詞の場合＞

・名詞の伴う助辞は断定・非過去・肯定に限られる。

・名詞に対応する主語の存在は義務的ではないが、明示される場合には、後方の終止節を指示する「これは」に限られる（木村 1983、金水・田窪 1992 参照）。

12）「ところで、お前はどこへ行きたい？アフリカか？シベリアか？／…いや。これは俺の想

像だが、お前はもう、人間のいる土地でも何でもいいのだろう。きっとそうだと思う。こんなことを言うのは気恥ずかしいが、お前は確かに変わったぜ」（黄金 351）

13） さらにこのハンカチは、ここ一年のうちに急に華やかになった万穂子の服装のセンスに相通じるものがある。／「つまりね、これはあくまでも私の想像だけれど、ハンカチを私にくださった方と万穂ちゃんのお洋服を選んだ方は同一人物じゃないのかしら。それも、あなたととても親密な間柄の男性」（ジョー 109）

14）「まあ、やめるまで三カ月ほどあるから、それまでにお客さんの顔を覚えてくれればいいんだけれども。僕の考えなんだけど、うちみたいな会社は受付に若い女性が座っているよりも、ある程度の年齢の人のほうが、いいと思っているんだよな。彼女は落ち着いていて感じもいいし」（挑む 239）

(2) 伝聞タイプの場合：

このタイプでは、ガ・ケレドモが、言語活動を表す動詞または名詞（句）に接続し、終止節の述語は、「～ラシイ」「～って」のような伝聞であることを表すモダリティ形式をとる。動詞の場合、名詞の場合それぞれで次のような特徴がある。

＜動詞の場合＞

・言語動詞には「言う」のような「発信系」の動詞の場合と、「聞く」のような「受信系」の動詞の場合がある。

・言語動詞は基本的には断定・過去・肯定である。さらに、「発信系」なら継続相、「受信系」なら完成相の形をとる。いずれも基本的に「ノダ」の形をとる。

・言語動詞の主語は「発信系」の場合は三人称、「受信系」の場合は一人称に限られる。三人称主語は明示が義務的だが、一人称主語は通常明示されない。その代わり、ニ格かカラ格の人名詞またはデ格の場所名詞が現れる。

15）「これは弁護士がいっていたのですが、酒癖はあまりいいほうではなく、酒を飲んで友達と喧嘩をしたり、奥さんを殴ったこともあるらしいんです。しかし酒を飲まない時は大人しくて、特に他の人と変ったところはなかったというんです」（脳は 20）

16）「米国のほうも随分と物がなくて困っているらしいわよ。父が話していたけど……墜落したＢ 29 の翼をしらべたらね、つぎはぎだらけのもので、スフ入り綿布に銀色の塗料を使ってあったんですって。飛行士の服も囚人の着るような木綿の作業服で色があせてたというわよ」（ファー 11）

17）「ところでね、辻先生」／医局長はこの時、からかうように愛子を辻先生とよんだ。／「主任看護婦にきいたんだが、君は君の担当している患者(クランケ)に、テベオンを投薬していないそうだね」（ファー 212）

18）「じゃ、主人は承知しないんじゃない？あなたに首ったけのようだから」／彼女はちょっと笑った。「ねえ奥さん、行雄さんに聞いたんだけど、あなた、ずいぶん前から彼とあたしのことを知ってたんですって？どうして気づいたの？」／母さんは目をそらした。「自然にわかることよ」（今夜 149）

＜名詞の場合＞

・名詞は「噂」などの言語活動の種類を表す名詞か、三人称の人名詞と「話」のくみあわせとなる。

・名詞の伴う助辞は断定・非過去・肯定の「だ・です」に限られる。「ノダ」の形をとることもある。

・名詞に対応する主語の表示は義務的ではないが、明示される場合には、後方の終止節を指示する「これは」に限られる。

19）「これは野田の話なんだが、実は一週間ぐらい前から、ミエちゃんに尾行がついてたらしいんだ。（後略）」（黄金 235）

20）「これも噂ですが、なんでも巣鴨のあたりで働いていたとか」（脳は 140）

21）「これは土地の古い人から聞いた話だけど」／（中略）／「昔、このあたりって、お金を配る時に蒟蒻の中に入れたっていうの」（幸福 262）

タイプＢの場合、接続節が上記の文法的特徴を備えることで、終止節の情報の確認のし方を表すようになる。動詞に接続する際、ノダの形態をとることには、「説明」というノダ文の機能との関係がうかがえる。一方名詞の場合は必ずしもノダを伴わないが、非義務的な形式的主語の「これは」により、終止節を指し示し、形式上述語となることで、その「質」を表す機能を果たすようになると考えられる。終止節の述語は当然のことながら、接続節によって示される確認のし方に対応したモダリティ形式をとるようになる。

ではなぜ、ガ･ケレドモを用いてそのような関係を表そうとするのであろうか。小出（1984）や才田ほか（1984）では、このような例を「注釈」の例とし、グライスの会話の公理等に対する違反について事前訂正をするものだとしている[10)]。聞き手への配慮から、「真実」かどうかを話し手自身が確認したわけではない推量や伝聞の内容を述べることは、違反とも言える。真偽の不確かな情報であることを示す接続節と、その不確かな情報を表す終止節を述べることに

「対立」があり、このためにガ・ケレドモが用いられると考えることもできる。しかし、実例を見ると、不確かなことを述べるという「違反」を訂正しているというよりも、むしろ話し手が積極的に自身の考えを披露しているような場面で用いられている例が見られる。伝達すべきでないことを伝達するという矛盾（対立）を表すためにガ・ケレドモが用いられるとは、必ずしも結論づけられない。

詳細な検討は今後の課題であるが、この種のガ・ケレドモは、情報の性質が「限定」されることと関係して用いられるのではないだろうか。限定するということは、そこに含まれない性質のものが他に存在することを含意する。つまり、その間には「対立」があるために、ガ・ケレドモが用いられるのである。実際の使用においては、情報の性質を限定することにより、「あくまで想像だ」と不確かさを表すこともあれば、「私の考えだ」と他者との対比を明示するようになることもあるのである。

なお、上記のような、思考活動や言語活動を表す動詞や名詞が、次の例のように「はっきり」「ずばり」などの副詞や「悲しい」「失礼な」などの形容詞を伴っている場合には、後述するタイプDに準ずるものになると考えられる。このような場合には、動詞が否定形式をとったり、名詞が「かもしれない」などのモダリティ形式を伴ったりするなど、タイプAやBには見られない特徴が観察される。

22）「年齢的にもそうだが、何ていうか、うまく説明できないが、自然なんだ。そう自然さだな。どちらもどこにも力を入れていない。自然体でつきあえるってこと。僕は末永くんを見る自分の眼が羨望でとがってくるのを禁じ得なかった」（砂の 25）

23）「はっきりいっとくが、あなたは医学というものを誤解している。医学はあなた達の思っているほど、すすんではいない。（後略）」（脳は 128）

24）「でも、梨果、くれぐれも変なふうに落ち込んじゃだめよ。ひどい言い方かもしれないけれど、あの人はもともとそういう運命だったのよ。梨果はまき込まれただけなんだから」（落下 260）

4.2.3. タイプC

タイプCは、接続節が終止節で話題とするものごとを指し示すものである。このタイプになるのは、下記のようなものに限られる。

・ガ・ケレドモが指示的な名詞（句）に接続する[11)]。

・名詞の伴う助辞は、断定・非過去・肯定の「だ・です」に限られる。「ノダ」の形をとるこ

ともある。

・名詞は対応する主語をもたない。

このタイプでは、先に挙げたタイプＢと重なる、言語活動を表す名詞も現れうるが、タイプＣでは、接続する名詞の語彙的な意味に関わらず終止節にはさまざまな文のタイプ・モダリティが現れるという点で、タイプＢとは異なる。

25）　井岡が皆を呼んだ。井岡の隣には、池田のぶ子が立っている。何の用かと、人形使い達はゆっくりとした動作で井岡の周囲に集まった。／「実は、池田さんですが、今年一杯で、しばらくの間お休みすることになりました」／劇団の連中は、もう承知していたらしく、たいして驚いた様子も見せない。（幸福な 153）

26）「大分二期計画ですが、当初の計画どおり推進したいと考えます。社の内外に異論があり、情勢が日々厳しさを増していることも承知していますが、（後略）」（生命 250）

27）「とにかく、わかっただろう。それから、いつか会ったあの女の子だが、あれはお前の妹だ。待子という名前だ」／信夫は泣くことも忘れて父をみた。（塩狩 36）

28）（前略）「住田は建物古いしな。そこら中のダクトにネズミが巣くっとるわ。オンラインのケーブルだけは、かじられんようにものすごい被覆になってるけど」／「へえ……。で、そのケーブルだが、引き込みとかは、大体分かるんだろう？」（黄金 30）

29）　夕方、加納は核燃の連絡本部に電話した。（中略）／「八日の件ですけどね、明日七日正午までに行き先もらえるでしょうかね。向こうからは、まだですか」（陸影 42）

このタイプにおいては、ガ・ケレドモが接続する名詞が、対応する主語をもたない。より正確には、主語 - 述語の分化がない[12)]。この意味では、かなり「単文」に近づいていると言える。この接続節の位置に単独で現れる名詞（句）が、聞き手にも特定可能な対象を指すものである場合に限り、「談話主題の提示」となりうる（不特定の対象は、純粋な「主題」とはならない。「＊ある人だけど、社長令嬢らしいよ」丹羽 2000 参照）。また、これからの話題を指し出すという機能からも、名詞が伴う助辞は断定・非過去・肯定でなければならない。

しかし、なぜガ・ケレドモによって主題を示す必要があるのだろうか。「主題」を表す形式としては、とりたて助辞ハを代表として、複数の形式が挙げられる。その使用条件は形式によって異なる。他の類義形式との違いを探ることで、どのような場合にガ・ケレドモが用いられるのかが明らかになるだろう。この点に関する詳細な分析は今後の課題とするが、少なくともハのように、前の談話から引き続き主題となっているものについては、ガ・ケレドモによる主題提示は現れにくい。先行研究でも指摘されているように、談話の冒頭や話題の転換に用いられ

やすいという点は注目される。高橋（1999）は、この種の談話提示により、これまで聞き手の中では潜在していた対象が、主題として「活性化」されるとしている。ただし、このタイプの実例には、聞き手となる相手が先に話題にしたことを指し示す、ソ系の指示語にガ・ケレドモが接続している例がある。単なる話題の転換あるいは「活性化」だけでない意味・機能があるのではないかと考えられる。

4.2.4. タイプ D

タイプ D は、接続節が終止節の内容に対する話し手の否定的な評価を表すものである。このタイプになるものは、ガ・ケレドモが形容詞に接続するものと副詞に接続するものという 2 つのタイプがある。接続する語が形容詞であるか副詞であるかによって、下位タイプに分けられる。以下、順に見ていく。

＜形容詞の場合＞

・ガ・ケレドモが接続するのは、否定的な評価を表す形容詞に限られる。
・形容詞の形態は、非過去・肯定に限られるが、モダリティは分化する。
・言語活動に関わる名詞が、後方の終止節を指示するコ系の指示語を伴って主語（あるいはそれに準ずるもの。以下、点線を施して示す）として現れることもあるが、義務的ではない。
・終止節に特に制約はないが、一部の形容詞については現れる終止節の文のタイプに偏りがある（たとえば「悪いが」なら依頼文、「失礼だが」なら質問文といったように）。

30）「残念だけどね、日本の警察のなかにはまだ容疑者に有利なことは黙殺したり軽視して、不利な面だけ取りあげる傾向があるんだよ。（後略）」（ファー 245）
31）「（前略）……ただ、こういう言い方は失礼かもしれませんが、わたしのお二人への感じでは、亡くなられた坂東氏は、なんと言いますか、かたくなに彼女の浮気と決めつけ、彼女の弁明は全然信じていなかったようです」（ジョー 229）
32）「（前略）こう云っては悪いが、三、四年前に異常な絵画ブームがありましたね。おたくらはじめ画商さんはずいぶん利益を上げられたと思いますが」（天才 49）
33）「雅男！まあちゃん！」／（中略）／「なにさ？」／顔を出すと、まともに前川先生と目があってしまった。とたんに、見抜かれた、という感じがした。この先生、僕が聞き耳をたてていたことを、ちゃんと知っている。／「あんた、悪いんだけど、お父さんを呼んできてくれないかしら。ワンショット・クラブに行ってると思うのよ」／「うん」と、僕はうなずいた。「さっき出かけるのを見かけたよ」（今夜 12）

34） まず家族構成が読めないね。失礼だけど、甲田さんちって、お父さん、何してる人？（夜の 264）

＜副詞の場合＞

・ガ・ケレドモが量や様態を表す副詞に接続する。

・量や動きのあり方の度合いが「小」であるか（少ない・弱い）、「大」であるか（多い・強い）によって、副詞の伴う助辞の形態が異なる：

量・度合いが「小」：基本的に断定・肯定の「だ・です」に限られる

量・度合いが「大」：基本的に断定・否定になる

いずれの場合も、接続節全体としては量や程度が「小」であることを表すものとなる。（齊藤 2009 参照）

・対応する主語をもたない。

・終止節は基本的に肯定形式の叙述文である。

35）「嘘だな。僕は、ほんの少しだが、写真の世界を覗いたけど、君みたいな美人の女性カメラマンを見たことはないよ」（寝台 20）

36） リカコが生まれたころのことをぼんやりとだが覚えている。突然現れた赤ん坊は古びたベビーベッドに寝かされて、黒目を小刻みに動かしていた。（後略）（夜か 35）

37）「本当にのぞいたんですか」／「え？まあ、計画的にじゃないが、たまたま庭を散歩してたらあの人が着替えてるところが見えたんでね」（青春 93）

いずれも否定的な評価を加えるものになるという点は共通するが、形容詞の場合は終止節の事態（あるいはそれを述べること）に対する評価を表すのに対し、副詞の場合は、副詞本来の機能に縛られてか、ガ・ケレドモが接続していても、やはり接続節は終止節の述語の表す動きの量や様態の側面を表す「修飾語」としてふるまう。このため、用例 35）、36）のように、終止節の中の、述語に近い位置に接続節が現れることもある。この意味で、副詞の場合は「単文」により近づいているものと考えられる。

このタイプ D の場合、「否定的評価」と記したように、現れる形容詞や、副詞（伴う助辞の形態とのくみあわせも含めて）の語彙的な意味が偏っている。本来「評価」には肯定的な評価もあるはずであるし、実際他の形式による「評価成分」（工藤 2000）には、「うれしいことに」「幸い」のような、肯定的な意味を表す語が現れる。否定的な評価を含む語に限られるという点に、ガ・ケレドモが用いられる動機となるものがあると考えられる。即ち、望ましくないと認めて

いることを述べるという矛盾（対立）の存在である。副詞の場合は、必ずしも動きの量や様態そのものには否定的な評価は含まれていない場合もあるが、ガ･ケレドモが接続することにより、当該の側面に話し手が否定的な評価を加えていることが感じられる。同時に、動きの成立自体は認められており、その対立がガ・ケレドモによって明示されると考えられる。

5. 意味・機能と文法的特徴の相関性

本稿では、接続助辞ガ・ケレドモが用いられる例の中から、接続節と終止節が非並列的構造をとるものを取り上げ、分析を試みた。まず、接続節が終止節に対して果たす意味・機能という観点から、主要なタイプとして、次の４つを認めた。典型的な例を併せて挙げておく（以下の例は作例である）。

A. 終止節の発話の、発話場面との関係を表すもの：
「あなただから言うけど、わたし、犯人を知ってるの」
B. 終止節で述べられる事態の確認のし方を表すもの
「わたし思うんだけど、わたしたちにも責任があるんじゃないかな」
C. 終止節で話題とするものごとを指し示すもの
「披露宴だけど、誰を招待するか決めたら、教えてね」
D. 終止節の内容への話し手の否定的な評価を表すもの
「失礼だけど、あなた、いくつ？」

そして、接続節の意味・機能タイプごとにその文法的特徴を確認した。その結果を【表 1】に示す。【表 1】から、意味・機能に応じて、さまざまな形で文法的制約が加わり、違いが生じていることが確認できる。逆に言えば上記のような条件下で、接続節が A から D のように機能しうるとも言える。

【表１：接続節の意味・機能タイプ別の文法的特徴】

<table>
<tr><th colspan="2">接続節のタイプ</th><th colspan="2">接続する語</th><th>接続節の述語の形態</th><th>接続節の主語</th><th>終止節の文のタイプ・モダリティ</th></tr>
<tr><td colspan="2">A</td><td colspan="2">発言動詞</td><td>断定・非過去・肯定</td><td>一人称主語
（非明示的）</td><td>制約なし</td></tr>
<tr><td rowspan="4">B</td><td rowspan="2">推量</td><td rowspan="2">思考活動を表す語</td><td>動詞</td><td>断定で「ノダ」の形</td><td>一人称主語</td><td rowspan="2">推量を表すモダリティ形式を伴う</td></tr>
<tr><td>名詞</td><td>断定・非過去・肯定</td><td>「これは」
（非義務的）</td></tr>
<tr><td rowspan="2">伝聞</td><td rowspan="2">言語活動を表す語</td><td>動詞</td><td>断定・過去・肯定で「ノダ」の形</td><td>発信系：三人称主語
受信系：一人称主語</td><td rowspan="2">伝聞を表すモダリティ形式を伴う</td></tr>
<tr><td>名詞</td><td>断定・非過去・肯定</td><td>名詞：「これは」
（非義務的）</td></tr>
<tr><td colspan="2">C</td><td colspan="2">指示的な名詞</td><td>断定・非過去・肯定</td><td>対応する主語なし</td><td>制約なし（質問文や命令文多）</td></tr>
<tr><td colspan="2" rowspan="2">D</td><td colspan="2">否定的評価を表す形容詞</td><td>非過去・肯定（モダリティ分化）</td><td>コ系の指示語＋言語活動を表す名詞
（非義務的）</td><td>基本的に制約なし（一部、特定の文タイプに偏る傾向あり）</td></tr>
<tr><td colspan="2">量・様態を表す副詞</td><td>断定。副詞の表す動きの量・あり方の度合いが、〈小〉の場合は肯定、〈大〉は否定</td><td>対応する主語なし</td><td>肯定の叙述文</td></tr>
</table>

本稿では以上のように、一般にはほとんど文法的制約がないとされるガ･ケレドモの複文にも、意味・機能ごとにさまざまな形で制約が生じることを明らかにした。そして、なぜこのような意味・機能をガ・ケレドモの接続節が担うようになったかについて、「対立」いう語をキーワードに、不十分ながら、考察を試みた。概要を簡単に記しておく。

＜タイプＡ：終止節の発話の、発話場面との関係を表すものの場合＞

このタイプでは、接続節によって、終止節の発話が何らかの条件下になされることが示される。これにより暗に、「そうでなければ言わない」ことが含意される。この場合、この含意との「対

立」により、ガ・ケレドモが用いられているのではないかと思われる。終止節の内容が、通常は口に出しづらい秘密であったり、聞き手に対する非難や反論であったりすることからも、このことが示唆される。

＜タイプＢ：終止節で述べられる事態の確認のし方を表すものの場合＞

タイプＢについては２つの可能性が考えられる。１つは、先行研究にも指摘されているように、会話の公理への違反に対する「事前訂正」というものである。接続節で「推量」「伝聞」であることを示すのは、伝えようとする情報が真であるか否かが不確かであることを示す。そのことと、不確かな情報である終止節の内容を述べることの間に「対立」があると考えられる。もう１つの考え方として、本稿では、ガ・ケレドモの使用により、情報の性質が限定され、それによりその範囲に含まれない他者との間の「対立」が含意されるというものを示した。この考えをとれば、「想像でしかない」という消極的な態度を示す例についても、「これは自分独自の考えだ」という積極的な態度で用いられる例についても、説明が可能だと思われる。

＜タイプＣ：終止節で話題とするものごとを指し示すものの場合＞

タイプＣでは、接続節が終止節の「主題」を示す。ただし、既に話題となっている主題を指し示す場合には用いられず、もっぱら談話の冒頭か、話題の転換時に現れる。特に話題の転換時に現れることから、先行する話題との「対立」というとらえ方が可能にも思われる。しかし、そうだとすれば、談話の冒頭でなぜ用いられるか、あるいは先に相手が口にしたことを指して「そのことだけど…」というような例の存在について、十分な説明ができない。談話での現れ方をより詳細に分析する必要がある。

＜タイプＤ：終止節の内容への話し手の否定的な評価を表すものの場合＞

タイプＤの場合、接続節によって否定的な評価を与えつつも、終止節を述べるという点に「対立」があると考えられる。形容詞に接続する場合には、基本的に終止節を述べることやその述べ方に対して、話し手自身が否定的な評価を与えるものとなる。これに対し副詞に接続する場合には、終止節の述語の表す動きに対し、その量や様態の側面に否定的な評価を加えつつも、動きの成立自体は肯定的に述べるものとなる。特に副詞の場合には、副詞の語彙的意味そのものには否定的な意味が含まれていると言えないものでも、ガ・ケレドモの接続により、動きの成立との「対立」が前面化し、副詞の示す側面に対する否定的な評価が読み取れるようになると考えられる。

本稿で取り上げたタイプＡからＤは、先行研究では広く「前置き」などとされることもあるものである。ガ・ケレドモが「前置き」に用いられるのには、今尾（1994）のように、「主節の焦点化（従属節の非焦点化）」機能が関わると説明できるのかもしれないが、「前置き」であれば何であってもガ・ケレドモで接続しうるわけではないであろう。ガ・ケレドモが用いられる動機についても、説明が十分であるとは言えない。これに対し本稿では、ごく簡単ではあるが、「対立」というキーワードで、各タイプについてガ・ケレドモが用いられる動機についての考察を試みた。この点をより詳細に研究することにより、ガ・ケレドモの意味・機能の全体像におけるこれらの位置づけや、今回明らかにした文法的特徴等との相互作用について、より精密な記述が行えると思われる。この点については今後の課題とする。

6.　おわりに：ガ・ケレドモの意味・機能と談話構造との関わり

最後に、談話構造との関わりについて述べておきたい。本稿でも部分的に触れているが、用例の分析にあたっては、どのような文脈で現れるのか、即ち談話構造との関わりに注目することが、さらなる研究の進展には不可欠であると思われる。たとえば、タイプＡの、「じゃ、言うけど…」のような例は、ある種の談話の流れに動機づけられて現れていると考えられる。また、タイプＣの例では、「この間のことだけど」といった接続節の後、終止節が述べられるまでの間に少しポーズが置かれたり（小説では「……」などで表記される）、相手の発話（「何？」のようなもの）が挟まれたりすることがある。このような、相手の反応をうかがうような用いられ方にも、このタイプの「主題提示」の特徴があるのではないかと考えられる。これらのタイプの例が、基本的に会話文でしか現れない、という点から考えても、談話構造（談話の流れ）といった観点からの分析が必要であろう。５節で行った「対立」というキーワードによる考察も、ガ・ケレドモが用いられた文自体の中では必ずしも行えないものである。今後はこのような観点からの記述も行っていきたい。

注

1）ガには、ケレドモにはない、逆条件節をつくる機能があるが（下の例文を参照）、この種の例はひとまず考察の対象から外し、本稿ではガ・ケレドモを基本的に同じ意味・機能をもった助辞として扱う。以下、本文中で扱う、一方の形式が用いられた例は、文体や話し手の属性などを考慮しなければ、基本的に他方に言いかえられるものとして扱う。

・どこへ行こうが、誰と会おうが、私の自由です。

また、ケレドモには「けれど／けど／けども」といった異形態が存在するが、本稿ではこれらを代表させて「ケレドモ」と称す。

2) 他のC類の例としては次のものが挙げられている：接続助辞カラ・シで終わるもの。ほかに一部の中止形で構成される節（「テで終わるもの」及び「連用形で終わるもの」南 1993：84-85）。

3) 前田（1995）では、接続助辞ノニの場合、「主節」として、命令文・依頼文のような実行的ムードの文や、意志表明や感情表出をする文が現れないことが指摘されている。また、条件形シテモによって構成される「従属節」の場合、テンスの分化がない（「主節」のテンスに依存する）。

4) 渡辺（2000：114）によれば、次の例1）の場合、2つの事態間に妥当な因果関係が見られないため、「対比的逆接」の例となり、例2）の場合、2つの事態間に、遺伝的傾向による因果関係をもとにした推論が可能であり、その推論と後件が食い違うという意味で、「推論的逆接」の例となる。なお、この観点は、同じく「逆接」を表すノニやシテモとの違いにも関わる（ノニやシテモは「対比的逆接」には通常用いられない）。

例1）象は鼻が長いけど、キリンは首が長い。

例2）両親は背が低いけど、子供達は背が高いなあ。

5) このような性質をふまえ、小出（1984）、今尾（1994）では、ガ（今尾 1994 ではケレドモも併せて）には、「従属節」を非焦点化し、「主節」を焦点化する機能があるとされている。丹羽（1998）は、ガを、「対立的並列」を表す形式と認め、その中に下位分類として下記の3つの用法を認めている（Pはガの前件、Qは後件の内容を指す）。(3) の「背景用法」は、上述の「従属節」の「非焦点化」（「主節」の「焦点化」）と通じるものである。なお、「対比用法」については「逆接」の解釈をも生みやすく、典型的な対比関係を表すものは形式的にも明確な対比の形をしていなければならず、かなり特殊なものであるとしている。

(1) 逆接用法：肯定と否定という対立関係をなすPとQを並列する。

(2) 対比用法：対比という対立関係をなすPとQを並列する。

(3) 背景用法：背景と前景という対立関係をなすPとQとを並列する。

6)「現代日本語」をどう規定するかには慎重な議論が必要だが、本稿では便宜的に、第二次世界大戦以降（1945年以降）に出版されたものを対象とすることにした。本文中で用例を引用する際には、用例末尾に付した括弧内に小説のタイトルの略称とページ数を「(略称ページ数)」という形で示す。略称については稿末の用例収集対象資料一覧を参照されたい。

7) 大阪大学大学院文学研究科日本語学講座設置のデータを利用させていただいた。本文中で用例を引用する際には、出典を「紙名　発行年 / 月 / 日　朝刊・夕刊の別　紙面」という形で示すこととする。

8)「並列的な構造」の例にも、「逆接」を表す以外に用いられている例が見られる。これは「前置き」（永野 1951、森田 1980）の一種であると考えられるが、これらの意味・機能の違いは文法的特徴からは説明できるものではないため、この点の分析は今後の課題としたい。

9) 言語活動を表す名詞にはほかに、「お願い」「相談」などもあり、この場合、主文のタイプが依頼文や質問文となっていた。「相談」の場合、「物は相談だけど」のように、慣用的なくみあわせの主語相当の部分として「物は」が現れるという点で特殊である。その位置づけは、タイプBの中の周辺的なものと考えられる。

10) H.P.Grice（1975）によって提唱された、“conversational maxim”「会話の公理（原理、格率）」のことを指している。“cooperative principle”「協調の原則」に基づいて導き出された、会話における4つの公理（量の公理、質の公理、関係の公理、様態の公理）を指す。

11) ここで言う「指示的な名詞（句）」には、固有名詞や「あの女」などの指示語とくみあわさった普通名詞などのほか、単独の普通名詞であっても、その種に属する特定の対象を指し示すことが文脈から明らかであるものも含まれる。

12) 次のように「話ってなに？」に対する応答として現れることから、名詞に対応する主語として、「話というの

は」などの語句を想定できなくはない。しかし、「ねえ、明日のことだけどさ」のような形で談話の冒頭に用いられうることから、このような主語を常に想定するのには、無理があると思われる。

・「話ってなに？」／「実は――」／「借金ならお断わりよ」／「そうじゃないんです」／（中略）「さあ、話しなさい、聞くわよ」／「実は学生証のことなんですが」／「うん」／「緒方さんにお願いして、あれをおあずけしましたね」（青春 105）

用例収集対象資料一覧

〈小説〉

※用例収集にあたっては、文庫版を使用した。このため、当該作品の単行本の出版年だけでなく、使用した文庫版の出版年も併せて示しておく。

※短編集については、文庫本のタイトルを作品名として示している。

赤川次郎（1985）『窓からの眺め』文春文庫版（1988），浅田次郎（1997）『地下鉄に乗って』講談社文庫版（1999），阿刀田高（1989）『Vの悲劇』講談社文庫版（1992），有吉佐和子（1972）『恍惚の人』新潮文庫版（1982），池澤夏樹（2000）『花を運ぶ妹』文春文庫版（2003），石川達三（1977）『独りきりの世界』新潮文庫版（1982），伊集院静（1992）『瑠璃を見たひと』角川文庫版（1996），五木寛之（1971）『青春の門　自立篇　上』講談社文庫版（1973），内田康夫（1986）『盲目のピアニスト』中公文庫版（1989），内田康夫（1996）『蜃気楼』新潮文庫版（2005），江國香織（1996）『落下する夕方』角川文庫版（1999），遠藤周作（1988）『ファースト・レディ（上）』新潮文庫版（1992），小川洋子（2003）『博士の愛した数式』新潮文庫版（2005），落合恵子（1985）『A列車で行こう』新潮文庫版（1988），恩田陸（2004）『夜のピクニック』新潮文庫版（2006），角田光代（1998）『夜かかる虹』講談社文庫版（2004），片岡義男（1992）『最愛の人たち』新潮文庫（書き下ろし），鎌田敏夫（1984）『恋物語』角川文庫版（1986），北杜夫（1994）『母の影』新潮文庫版（1997），北村薫（1992）『六の宮の姫君』創元推理文庫版（1999），桐野夏生（1995）『ファイアボール・ブルース』文春文庫版（1998），小池真理子（1986）『彼女が愛した男』角川文庫版（1988），曽野綾子（2000）『陸影を見ず』文春文庫版（2004），高樹のぶ子（1990）『霧の子午線』中公文庫版（1995），高杉良（1983）『生命燃ゆ』新潮文庫版（1998），高村薫（1990）『黄金を抱いて翔べ』新潮文庫版（1994），辻仁成 1996『ニュートンの林檎（上）』集英社文庫版（1999），藤堂志津子（1990）『ジョーカー』講談社文庫版（1993），西村京太郎（1990）『寝台特急「ゆうづる」の女』文藝春秋，乃南アサ（1988）『幸福な朝食』新潮文庫版（1996），林真理子（1999）『幸福御礼』角川文庫版（2001），東野圭吾（1989）『眠りの森』講談社文庫版（1992），平岩弓枝（1984）『風祭』角川文庫版（1985），松本清張（1979）『天才画の女』新潮文庫版（1982），三浦綾子（1968）『塩狩峠』新潮文庫版（1973），宮部みゆき（1998）『今夜は眠れない』角川文庫版（2002），宮本輝（1985）『ドナウの旅人（上）』新潮文庫版，向田邦子（1981）『あ・うん』文春文庫版（1983），村上春樹（1985）『羊をめぐる冒険（上）』講談社文庫版，村山由香（1995）『青のフェルマータ』集英社文庫版（2000），群ようこ（1997）『挑む女』文春文庫版（2000），森瑤子（1988）『砂の家』新潮文庫版（1991），山田詠美（1993）『ぼくは勉強ができない』新潮文庫版（1996），山本文緒（1999）『落花流水』集英社文庫版（2002），唯川恵（1996）『イブの憂鬱』集英社文庫版（2002）、吉本ばなな（1996）『SLY　世界の旅②』幻冬社文庫版（1999），連城三紀彦（1994）『花塵』講談社文庫版（1997），渡辺淳一（1974）『脳は語らず』新潮文庫版（1991）

〈新聞〉

※大阪大学大学院文学研究科日本語学講座設置のデータを使わせていただいた。

・CD-ROM 版　毎日新聞 2006　データ集　本社版　毎日新聞社

参考文献

今尾ゆき子（1994）「条件表現各論―ガ／ケレド／ノニ／クセニ／テモ―談話語用論からの考察―」『日本語学』
木村英樹（1983）「「こんな」と「この」の文脈照応について」『日本語学』2 － 11 金水敏・田窪行則（1992）「談話管理理論からみた日本語の指示詞」金水・田窪編『指示詞』ひつじ書房
工藤浩（1997）「評価成分をめぐって」川端善明・仁田義雄編『日本語文法　体系と方法』ひつじ書房
工藤浩（2000）「副詞と文の陳述的なタイプ」森山卓郎・仁田義雄・工藤浩『日本語の文法３　モダリティ』岩波書店
小出慶一（1984）「接続助詞ガの機能について」『アメリカ・カナダ連合日本研究センター紀要』7
才田いずみ・小松紀子・小出慶一（1983）「表現としての注釈―その機能と位置づけ―」『日本語教育』52 号
齊藤美穂（2005）「複文と会話の構造―ガ・ケレドモが思考・発言動詞に接続する場合を中心に―」『日語日文学研究』53 － 1　韓國日語日文学研究会
齊藤美穂（2007）「名詞句に接続するガ・ケドの用法」『阪大日本語研究』19　大阪大学大学院文学研究科日本語学講座
齊藤美穂（2007）「数量を表す語句に接続するガ・ケドの用法」『待兼山論叢（日本学篇）』41　大阪大学文学会
齊藤美穂（2009）「副詞に接続するガ・ケレドモの用法」『阪大日本語研究』21　大阪大学大学院文学研究科日本語学講座
高橋美奈子（1999）「‘判定詞＋接続助詞「が」’による主題提示を持つ文について」『日本学報』18　大阪大学
丹羽哲也（1998）「逆接を表す接続助詞の諸相」『人文研究』第 50 巻第 10 分冊　大阪市立大学文学部紀要
丹羽哲也（1999）「対立的な並列を表す接続助詞「が」」『大阪市立大学文学部創立五十周年記念国語国文学論集』和泉書院
丹羽哲也（2000）「主題の構造と諸形式」『日本語学』19 － 5
野田尚史（2002）「単文・複文とテキスト」野田尚史・益岡隆志・佐久間まゆみ・田窪行則『日本語の文法 4　複文と談話』岩波書店
前田直子（1995）「ケレドモ・ガとノニとテモ―逆接を表す接続形式―」宮島達夫・仁田義雄編『日本語類義語表現の文法（下）　複文・連文編』くろしお出版
南不二男（1974）『現代日本語文法の構造』大修館書店
南不二男（1993）『現代日本語文法の輪郭』大修館書店
森田良行（1980）『基礎日本語 2　―意味と使い方―』角川書店
渡辺学（2000）「逆接表現の記述と体系　ケド・ワリニ・クセニをめぐって」『現代日本語研究』7　大阪大学大学院

（文学研究科助教）